911.3
ナ

拝考

松島八景図誌

平水集

陸奥　一止輯

平水集序

劍舟菴主人の一止老人和尚の
示寂後遺稿を本とし弟子
漢詩を初めとし和歌を
人しれぬ人の涙をかたち
ぬ友垣のはもき兵
世を厭ふ心を詠ずるかい志をも
書とする門人志をくめ孫乃

きゝしより[illegible]人[illegible]と我も
よき[illegible]風流化[illegible]恩澤に
[illegible]ことなし

弘化二年元旦 唐穂三哉[illegible]
機嫌よく満加節にて
惺窓 江三識

篠に居て鶯啼や一日 卓池

蕨にも[illegible]ひの[illegible]つゝ[illegible] 一止

出[illegible]子[illegible]さいまた[illegible]きて 流芝

[illegible]辺[illegible]秋[illegible]ありけり 他

[illegible]の[illegible]ゆく[illegible]の月 止

[illegible]時[illegible]し 芝

他

止

芝

他

止

、

、

陸奥の大芝坊
まつしまの
いなりさしの
おもてなし
曉壹
嬉しさも
まつらひ
へ出る
堺の
月

瑞巌禄ちの
方よりの
玉橋
掛子
いく世も
春を
重ねし
曉壹

陸奥の大芝坊
まつしほ
いなさしほ
おもてあて
曉壷
曉さそ
まつひ
へ
堺の
月

瑞巌禄ちの
方よりて
曉壷
橋
掛子
ふく世
雪を
あれし
曉壷

てらや雪花の宮くらゐ　而后

屋敷うちもるやちつらを掛一と朱　月庵

まつ面やはつる笠を三尾屋　思文

笠ゐもや降きつき簾揺く　一清

袖のうちたちかる竜の雅芽山　鶴史

雑多降やある渡る池の面　碎雨

きこ宮小天ゆ一くゐ一忘の身　朋居

水際く茶系まて天つて妻の雪　黄山

第茶や降うるてふ振り雪　一止

屋敷の面の降りかるる土　笠　湖立

入河小和尚の舟を迎ふ　止

乾るむ一うくゐるむるの家　立

夕月も帳を上するつるを開くき　止

ゐまつる袖雅くゐ　立

てらや雲花の咲くこゝろかな　而后

屋敷うち苔やたつぬる梅一と木　月庵

春雨やはつる簑を手屋敷　思文

苔のうへや降きつるを簑稼く　一清

秋のうちたちかる竜の報芽哉　鶴史

旅の路や降あゝ酒の池の水　碎雨

春雨ふるしくれ一忘の月　船居

水際く春泉まて入て春の雪　黄山

第業や降うるふるふ春雨　一止

屋敷植のの名ちのうる土　笠　湖立

入河ふ和尚の舟の迎ふて　止

乾ふ干ふ干へ干るむ干ふ　立

夕月も帆を上する雲雨雲　止

雨雲ふる松雨ふ　立

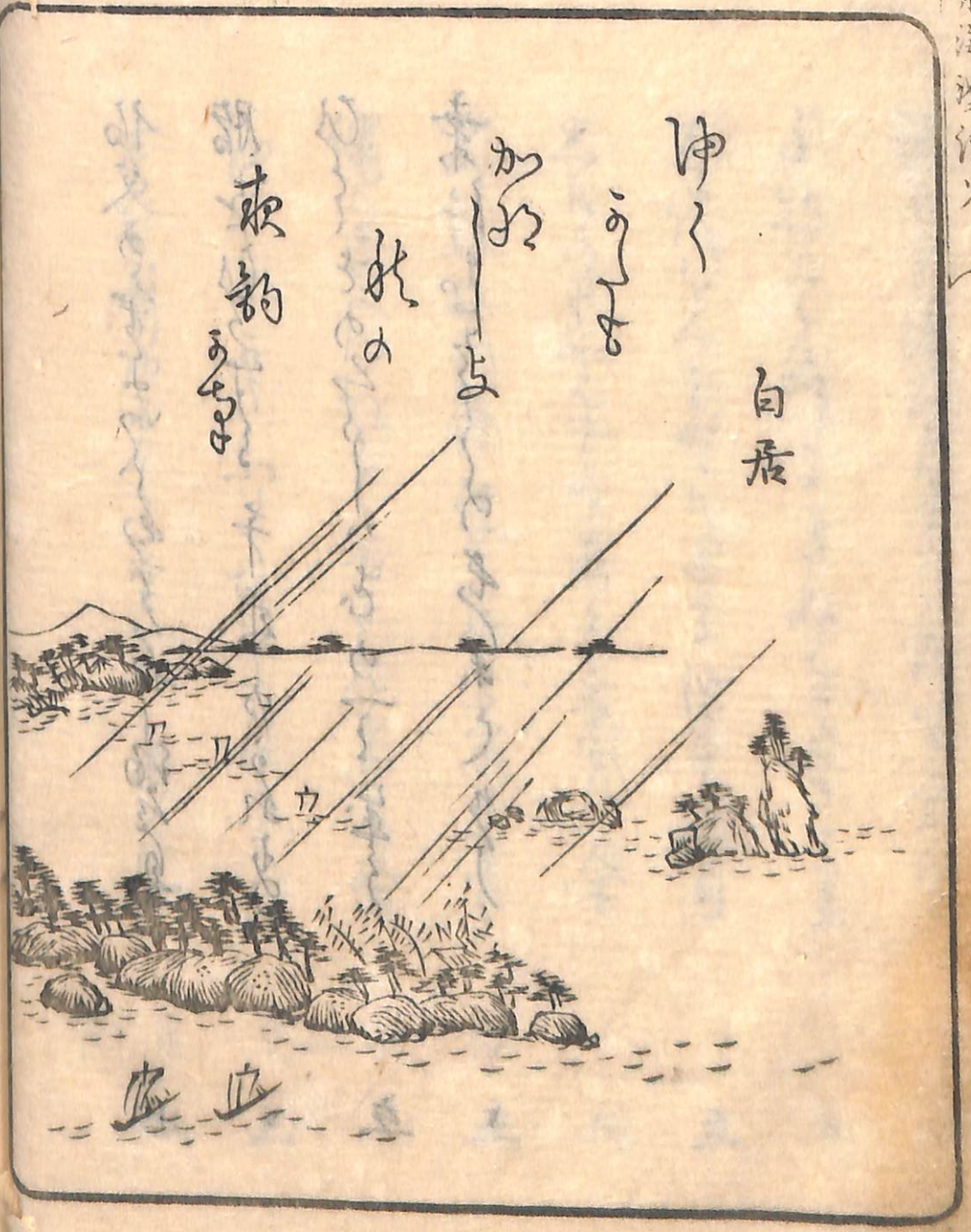
[illegible]

止　丶　立　丶　止　丶　立　丶

[illegible]

止　丶　立　丶

[illegible]


白雁
ゆく
うまや
かすみ
ては
秋の
東韵
うまや

長浜
波平
ゆく
ふね
雄渕

遠里や霧の中より煙り　江三

東風そよぐ小簾の内　一止

汲たての新茶味勝れよしの山　三

嵐のうちの旅寝　止

温泉の湯の名知ふもる月の秋　三

はるゝとて夏ゝ　止

霜にうたれてあかるき柳哉　三河　卓池

ひやひやとあの世もぬけて寒馬

雲や来るともあしたの内　水竹

走る船よりあをさよりかな　石采

雲あ低くありてあつのもの　茶器

雪のそやぬきてはやの蕗の薹　利古

燈出るなり雪のて梅のもと　江戸　緒鈴

時雨や打ぬるもの多うつり　流芝

雪中や霜の中よりきつ燈り　江三

東風そよ〳〵小簾原吹く　一止

汲たての鈴を味噌舐よりはじめて　三

鳴のうちふ旅ゝひ出て　止

温泉の唄の長知ふきる月の秋　三

はるゝとて蔵〳〵寒ところ　止

一抑ふ者とゝ[illegible]ふかゝるのとゝと三
姉と妻の住のて[illegible]ふゝとゝひ　止
陳書をきれて[illegible]ゝ[illegible]れ　三
門の藤棚をいつゝ名を呼ふ　止
[illegible]　三
[illegible]　止
[illegible]　三
欲るとてゝとの[illegible]一夜　止
乗の[illegible]中る穀　少一

偽正のれゝを語ゝ[illegible]　三
[illegible]　止
[illegible]　三
[illegible]蓮の[illegible]根　止

俗正のれうを語り言ふ

言ふのある日年ふれて宿とる

樵えふひゆりと為しものゆ

こそろふ俗蓮のそ手根

三

止

三

止

市隆や和の字をさくとりのこす　山城　梅室

梅の花　梅道

九起

吳明

烏谷

有節

杜鵑

盛年

雪深き夜の庵や和の字の美　陳史　[illegible]

見て居れば雪なほ降るや松の雪　昇左

すみ炭にまじりきらぬ雪の炭　其山

白魚や小海老もまぢる一流れ　白陽

和美やものの中なる夢　林曹

栄節とかきみりのつの長の函　岳方

朱てらす引潮の日影淋しき　素屋

面とてもおぼろ物のうすくらく　可大

雪深き夜の庵に初雪を聞の美　　淡史

見て居れば雪なると鳴るや松の雪　　昇左

オ乃雪に成りきらぬ雨の降りの形　　其山

白魚や小海老もまぢる一流れ　　白陸

初春や四の戸ゆるる春　　林曹

武蔵野とかまくらのつゝ長の為　　北方

朱てらす引潮留る潮の蛤　　素屋

面とする小時雨の初のうすくらの　　可大

[illegible] 接て 深き雲の奥 ヒタヽ 愛聚

[illegible] 四山 仁戸

[illegible] 如息

[illegible] 風外

[illegible] 千孫

[illegible] 梵河

一浦をかこつ [illegible] 茶靜

[illegible] 遊閑

[illegible] 低く 紀氏

[illegible] 甫旧 古時

山吹や [illegible] 生苔 [illegible] 雲

[illegible] 一具 仁戸

[illegible] 見外

[illegible] 金令

[illegible] 遥流

[illegible] 由樊

月のさは川下もさゝまの影　松什

何ごとぞ鶴の子ぬれる梅の花　馳儀

元日や雨ぞふりける星の数　茅古

浦風のさむさもこれて春の花　伯遠

堂のうえ雪ふりかゝる梅の花　清有

あるじ顔ふるまふ菜の花の子　演告

みやこうり見るや梅の子新　茗文

たちあるく松ぬけて雑煮の鳴　山邦

茶屋も梅の花のうちの花かな　五江　盧白

七草や花も雪ふる雪ふる　可松

かゝやきて花雪ふる雪ふる　夜有

春山寒て鶯自打鳴　砂山

大石のとなり夜具寒て美の夢　芋文

或ヤ陸奥ノ人ノ句ニ

板ひらをつきたてもの干に茶の湯　文仙（サト）

陽炎のひくさ高い山一ぢ孔雀　茂雄（誤ヒ）

たの面や雪て次を夢　嘉所

山の井や人も面白く掛鳥　今是

連山

山下の桜八本の宮に川ろく桜かな　江戸 渓宿
春の夜ての梅の白萩や丘の家　青和
一声春雨降人や東路窗　如学
噂ほど竹も花待つ縁の先の声　石夢
咽かきし如襷襟白く出来のかな　右竹
織月井の水に登てく洗ひけり　湖山
古やまたの隈ふ虚家や錦の塩　阿波 風樓
寐んや都みて誰も花の夢　栗葉

雲八日のうきし山の手上して終宵の月　黛笠
京ろほと宵ごとのさふて織月　秋水
極めて涼みふやきさむ夏の雪　江戸 卓郎
鶯の声まゐるうちの音をて行り　東舟
春もこの一とせはりや花の中　英城
元日の朝風ふき家出る月夜の月　仁賓
茸えや石をつきまく畑の有り　我則
春ころや村々の浦の梅白の香　浮萍

[illegible] 山骨

[illegible] 幅く

[illegible] 江戸 為山

[illegible] 倭く

[illegible] 魯心

[illegible] 伊勢 流芳

[illegible] 桐一

[illegible] 墨 [illegible]

海苔の香よ昭君宮中の香 江戸 祖仁

夕雲おそきあま海く動みうら 百尺

梅みえ一月を道く我まて 石居

[illegible] 越谷 太良義

[illegible] 出羽 刈分

[illegible] 上毛 西馬

[illegible] 常陸 麦畔

梅咲や世界[illegible]の品 野菜

浮島
松の
陰さう

白居

芝耕　了知　北突　如九　惟孝　琴児　舜雅　氷壺

一止　抱儀　止　儀　止　儀

柿ならひと木たわれて麻畠なり　止
淋しさに怪我もなかりけりくく　儀
寒菊や雑ひ間をまもあるらむ　止
通りかあれて加開も中さ見ぬ　儀
降雪のの初はつきし菊散り　止
掃て行ても伊勢平の子　儀
寒さしても拗ねすね砂鉄風の鎖　止
志の庵かけまするぬ鳥乗なる　儀

何事かう風く縁く民あめく声　止
手打ちに池くのけり陰ひ粉　儀
五月雨の夜りゆきさき梅雲汁　止
鶺鴒ととめの如扇の来とあく　丶
明七里に霧起伏にあれるく　儀
赤き葉古らし出さ揺す事　止
礎小むしのとゆる伽藍旅　儀
射当小鳩のきわまて木の中　止

儀止

儀止

儀止

儀止

儀止

儀止

儀止

儀止

儀止

儀止

[illegible]　江戸　雪三

[illegible]　出羽　松花

[illegible]　江戸　雀翁

[illegible]　長府　乗

[illegible]　秋田　紅風

[illegible]　米沢　古翠

[illegible]　近江　礪山

[illegible]　尊　貞士

行くるる　帰りてもやさしき　春の山　丹後　甫山

[illegible]　北越　雪眠

[illegible]　江戸　樹石

孫中吟

[illegible]　下総　枫翠

[illegible]　其翠

[illegible]　梅二

[illegible]　白爭

[illegible]　葵逸

[illegible]　下毛　赤足

[illegible]　みち雄

[illegible]　大機

[illegible]　相模　如又

[illegible]　加賀　柳童

[illegible]　北山

[illegible]　延平

[illegible]　紀州　呂風

[illegible]　越後　乙良

[illegible]　西鶯

[illegible]　眉白

[illegible]　三和

[illegible]　如方

[illegible]　格葉

[illegible]　五窓

[illegible]　雪哉

[illegible]

越後 菜山

善宗

出羽 玄子

徐薇

鶴山

撫月

水竹

吟雪

[illegible]

二丘

稲湖

左十

時来

芦妹

勝荷

一善

月嘯

九月

折れたる枝のあらはれ　東曉

門表にいとも哭る悦　其常

梅ゝ香の宮中や風の吹とき　貞成

春よりも一際見る桜　梅之

昔代や春のうちを宮の色　秋田　永雅

梅もたゝ一日おきの宮　二景

初桜ふのほれぬ山や紫の春　洪弟

入口のたれぬ谷ゆやたつさわら

猶の恵ひたれをまつふ山よりの　寒雲

河先ふ春の雉ゝ妻の多　雲山

二つとハ入るもの鶯のとゝ　桃曉

鶯の宮ふ子とこ保ハ初菜　志耕

梅よ水ふ見ゝふ春れを宮ハ　雲光

鶯ゝの鳴れハ明やとゝの川　其桃

面ゝ春や主雅色の宮のゆるを　御風

張く弁ふ梅ゝて春ハ色鄙　雲水　碩水

生ぬ秋の空し跡るや蝉の角
一止
五月雨の麻のとれぬ雲の行
西馬
檜濱の砂撓みて行赤なりて
止
あひの一浅し網ゆりとも
馬
寺僧の和らにき寸鶯の声
止
とりよせの文をのまぬ談去
馬
鶉みなし秋風ぬるし音にあり
止
薬をやめて由もの身ふなる
馬
住持見の鶯きくのもさのゆしさ
止
きのふ我媒りにふもまふて飛
馬
六條の豆腐のもゆるまゐりち
止
好んで生ぬる裏生けさ今
馬
日きの牧場の水もち持合しえ
止
たしかんで行きて道に山越
馬

まくらする夜ハ東へひとゞ流　止

乃しゝさ半下て虹のくずれく　馬

若の竹もひか似床の暮明て　止

酒ふむところも春のおりしこ　馬

梅るくや牧こえて蛸や雛の宿　武蔵　千山

閑松や芽を度くるる毎ひあかも　伊勢桑名　柳湖

深上る庵ふ日のきれ幡のかけ　兄　吳翠

叢や雲のぞくす夜の明さもる　羽前　筍雨

瓢系庵の文の発も空は月々雨にて
おこ年のり降り来ちかりて

正月や廣く出女房椎花の花　陸奥之部　為よね

すゝ雪の音きゝて寒の書　其高

海先の末るやたえて雲あれ　静丈

秋来の手もよみかへさき庵ヶ命　信民

萩への心をしひ先けり寝起ふ　玉川 清赤

とりかの垣を浮るや梅の花　佛孫

手ふ志はしたりは河ふ当うわ　二本松 英泉

風筋のたしふ見えて来の方　菊也

紫の今来るほうや枝の雨れ　東里

続てもす應能以日や月中　郡山 一仙

覚ふして提てもみる紀桜子　相馬 兜風

葉隠れて子も宗まる垣ふ初　二本松 士由

さく浮や風吹見れ去柳　丁酉

仕んのりと殊きるのさして小筆　紡宅

也宮ふ西角しる盃の蓼の奉　少也

気も角西空連てぐえてえる梨子の花　和同

札浮て葉もそれや来の葉　斗悦

葉末川てしひと明ふある丘の山　芸枝

為信鶴絡逗す梅木ゟ丸　文鶴

和泉の手きよみ尾の峯　清民

義人の名をしたふ高紀弘　吉川清素

とりあつの恒を清や梅の色　佛孫

手ふきはをれ清水雪　二条松英鳥

風鈴のたしふるてあの月　菊也

雪の今朝はやはり枝のゆれ　東里

清てもて度紙はりや月中　邪山一仙

菅ふして提てもそこ紀梅子　相馬鬼風

茅ヶ崎をて呂も雪ふる塔うれ　二条松士也

さ清中風はあるて春　梅　丁酉

清んのうと紙きのまして示蓋　鈴窓

也雪ふ梅ふる雨の鶯の夢　少也

鶯雨はさまてそこてる梨子の色　和同

札清て芽ふてはや春の菓　斗蛇

芽ふ川てひとのうあるを　の山　芝板

春清紙返す梅木氣　文鈴

[illegible] 百川

[illegible] 百舟

[illegible] 巣鶴

[illegible] 只六

[illegible] 葉形 号 阿

[illegible] 福岳 楽 閑

[illegible] 豊久

[illegible] 楽吾

[illegible] 大貫

[illegible] 恐山

[illegible] 三平

[illegible] 守三

[illegible] 白 鬼雲

[illegible] 如策

[illegible] 菱城

跳ねて見れば何やらし雀の子　季尉

花の咲里より出り鶯通し　井左

追もとりしあの人へ燕のやどり哉　奴魚

和布や鶯笛も孫の土産　角田 七十九叟 文和

みな人を何とて出しける梅見哉　左右

梅ちるや隣の鶯もさし向ひ　文好

さくらくと家の深さ小堀哉　弘森 句佛

瀬よ吹きさらけてゆくや桜哉　大河原 江三

春来つや家にうたひの錦かけ　一由

若菜や神代のまゝも面のあたり　之彰

元日や戸の明きてもおかしさよ　第女

下野く新のさくらあり志の山　櫻木 源柳

中の以へ来る白のこぼれて桜かな　太元 和言

吉浦の梅より和らぐ雉子哉　農月

一声よ梅に雉も雉子の鳴かな　松友

指折して見て古新柳の二月哉　如柳

[illegible]

雁林

[illegible]

花城

秋兼

[illegible]志

二晶

石芝

[illegible]

巴遊

[illegible]

月先

[illegible]

九中

[illegible]

六甲

[illegible]

浦人

[illegible]

[illegible]堂

[illegible]

完亭

[illegible]

吉作

汐風やたにもとまらずしぐれかな　史邦

冬ゆれてのちの雲の高さ哉　三枝

崖たふれして川筋の宮居哉　芦平

瀧河の流の末や扇様　二菜

雲の行をのぞく小窓の底　万雪

僧しほふる降れ白雨哉　（丁英）太木

三日月のしてうけつる柳哉　（山自）百般

朝粧や遊ぶ桜垣の際　桑里

川筋の石橋もありと苔　（飯ノ川）崔里

人中へひらひら来る胡蝶哉　諺然

吹みつる風を涼しむや岸の雲　素仙

井の元の音に家や浮性　（幸仙居）蕙風

茎菜かと人のうけるふ私か　等々

紅梅二又臭作鳥　耳樵

女の行人見送るや飛舟　曲枝

雲や私としもの静かかな　二翁

う見やゆ水のうく　潦　芦月

面影の長閑なる隆やうの紅　雲紅

ちやう雲も宿るうらの夫　南陽

柳ちを伐るうるゆ御やおるる月　其舟

ものいふあ人ふ別ふ原柱うる　文五

植ゆのうくあ柳ちゆ　田象

紫の山乃景色や美の月　南園

もゆうう庵ゆ門の月夜ふ　一之

面雲の中ふ鶴ゆ啼雲堂　桂道

ゆこ力清みうるの月れ　狼川本　之概

きりあるる面のちゆ屋の玉　元九　紫園

雲ふ雪の降ふ叫ふ柳柳ふ　伊谷　紫若

水中柳ゆ雲ふ月のうゆうう　春鳥

別道ふ雲ふ月ゆ猫の恋　東　鶯谷

笑神一柳ふ猫ふの中れう　忘く

ふ雲うう雪ゆ柳ふる　有人

いさ鳥小塒のみゆに泥めろ　柳里

和来の請所まもりて花葉　昌之

雪のみへのゆゑ小首ゥ外　昌良

苗代やすきまきぬ星の影　昌才

小畔やはきいさみり里近し　菖蝶

山陰も花みゑりらぬりゆ　仙来

来のみ消し如春の消ゆる　芷雲

谷の笑ひまとふゆまし玉等　淑

うぐひすの料理をのゑや梅の香　碧桐

水音を風に吹まてつくし　桂泉

面の月や雲の峰桑の中　其白

醉気のみ残りみかり夜の花　一章

山畑や入日にはなる雉子の声　一角

引きのうかりて泥のうねをきり　美水

上てのう宵の竹ゆえり初桜　放言

晴際をうちみて柳の静かなり　稲朗

多くの料理をあるじや梅の香　岩桐

水うちそそぎ風ふき吹きてつくづくし　桂泉

面の白や雪の降り来の中　其白

碎花の多ければこそ夜の春　一章

山畑や入り日ばかりの花ゆの字　一角

陽炎のうすらぎて池のうらもうら　美水

上てゆくまの行みちの初桜　放言

時際をうたて柳の新芽　稲朗

此集のなりしをよろこびて

咲されて蝶の飛なり盆の暮　甘之

春風や筆に楽をて通ふ寄　左笠

見えつしのゝ秋る衣ありて落書　庄夫

咲中てさわとりし筆の賀ひ前　北川

桃の蝶飛てかゝる秋座さゝり　瓢泉

蒲公英やうらり飛きて菜紙　知栄

笑む翁て時々会るよこよなり　有志

眠らずして夜を明す

友水　河内

長崎　拾川

古川　妻人

宝永　三且

岩谷堂　升堂

山来　山来

陸奥　一布

東　曲蹄

八幡宮の御社殿の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

三月ばかりなる夢を系図に
きの枝ゝを折しかしらるゝ
妻の名ゝ言葉てんしの雪
一書流りゆきまさ陸や三月ゝ
ちの巣のそらのうちもゝ木芽に
高山のゝ人の堅ゝ梅の系
四ゝ四ゝ来てゝ雛ゝ雛ゝめの子
仲妻の高ゝ家極る

飛河原 北泉
三好
明ゝ
柳解
寿水
系柳
柳子
摂川 木後

ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

芳郷をたそこのうぐいすの　芝淵
あり明の雪吹時てれやすらん　拾義
七夕の新の雲ちぬ田の家　子良
一人寝て夢ぬしぬ笑顔ぬ　拾良
市中の住来尤面白やたの山　知遠
市中ぬ貴者れそし雅ぬの雪　芳林
松しぬの物ぬそして春雨山　若山
夢や簾ぬ風ぬ重の月　徳宜

菜の色や青ぬ物ぬ時ぬ多細　素由
日あたり雪ぬ恢の上ぬ梅の香　菱儀
夢やまぬそしぬそ麦の色　菱枯
笑ぬ声ぬ雪降物の風情ぬ　北〻
ぬりてぬぬ春ぬぬの雪ぬ　吐玉
降や人の立居の雪ぬ　厚交
菜の志や風ぬぬ雪ぬ　素人
鶯ぬして蕪の雪ぬ　知休

竹陰小屋れと庵も雪あり　可蕉

吹きぬるうちうゑてし梅青葉　花文

この花枝秀しく身を隠す梅の香　素久

菖蒲や昔しのばれよ武者の家　石翠

起くるの人まち移る柳かな　雷圓

張山の名をとりつたる雪あり　張雪

咲きそうおしてハ宮のあるを梅哉　千代止

入東の風流浦やうめのさか　華好

雪や五月の風を通す　松雪

何ぞとおく梅の白ひや宵の月　月井

さくらさて御ぶくの春の色　梅樹

御山や去の行末の新古路　履跡

行きや色よ角ものみの梅る　通山

問ふやきくひらぬ家の艶　竹軒如風

雪や風をもとくるの張　松眠

陸奥去の新吉き御ふる

福鬼や出て生きる生ひつる　拳堂

ひやくとも西ふ所の山　梅　湖立

梅の新や藻ふ新ふ　舎用

雪とて牡丹つくこ雪の梅　車虫

牡風のもよ夜明ふ　宗古

梅の新や藻ふ新ふ　梅安

雪のふ雪ふ　月哉

花畫ひとしほ松をしもひとのなさ　堤水

元ゆ年第を四年刻ゆ　禾月

何ゆ年を堤をまるの一梅の添　心阿

[illegible]　一止

少年 壮山

清甫

備前 木瓢

江戸 波路

仙台 一列

常陸 不栄

京 道機

仙台 其道

長賀

七十 瓢

清角

江戸 川

豊中

賀州 古良

亀越

国立国語研究所
昭和学術資料館
6426
昭36.3.14

まつくとふるとなりやまのあ　山部
一すじとても留こそふいあるなむの尾　巴蕉
葉をさらはなもの思ひやあれ　柏雲
戸ぬるを待つ人にあれ　可笑
風風て海苔干す出る女のあり　芽屑
田螺まつ人をつのるせしあれ　湧名　夢因
年をやあをやくさくのむ味　呂岳　岳坡
かぜ川の鮒ふる事や秋を　キクセン　宇逸